



今、布教使は何を望まれているか

やました ぎえん
山下 義円

全国に設置されている各教区布教団から構成される布教団連合では、2007(平成 19)年度から8年間にわたる「布教団連合親鸞聖人750回大遠忌長期計画」を策定し、その計画テーマとして「親鸞さまの魅力を現代に！～阿弥陀様の温もりに出遇えたよろこびを確かめあい、わかちあいましょう～」を掲げて活動を推進しています。

この計画において親鸞聖人750回大遠忌は、同700回大遠忌から現在に至るまでの50年間にわたる教化活動の総決算として、真摯に布教伝道活動を顧みることが重要であり、次の800回大遠忌に向けて、さらなる布教伝道活動のあり方を考える重要な始点としています。その始点となる明年、親鸞聖人750回大遠忌法要の年にあたっては、「第13回全国布教使大会」を計画しており、50年後の宗門を見据えて、現状を顧みながら今後布教使として、どのように実践していかなければならないのかを深く考えていきたいと思っています。

数日前、十数年前に中央仏教学院の通信教育を受講された知人に久しぶりにお会いすることがありました。聞いてみると、経営していた会社が倒産し、人間関係に悩まされ生活にも行き詰まり、何度も自死・自殺を考え、死の恐怖に襲われる日々を送っていたそうです。そんな悩みを抱えている時、藁にもすがる気持ちでお寺に行ってみたそうですが、お聴聞しても話が難しすぎてわからず、また自分の悩みに応えてくれる話とはかけ離れ、期待しているような話を聞くことができなかったようです。そんなことを繰り返していたある時、自分の悩みに応えてくれる布教使との出会いがあり、今は聴聞を楽しみにお寺に参られているそうです。通信教育を受けられた方でも、布教使の言葉が難解すぎ、かつ自分の悩みと交わる話ではなかったと思われたということです。寺院に参られていても、布教のあり方ひとつでご縁がなくなる方もたくさんおられるでしょうし、また常に聴聞される方であっても、信心の重要性を実感できていない人が増えていると言われる状況を踏まえ、現代の人たちが、どのような苦悩や不安を抱えているのか、

その悩みが世代や地域によってどう異なっているのか、現代社会はどんな特質を有するのか、その状況を深く考え布教がどう関われるのか。布教伝道活動の第一線に立つ布教使は、その対応力が求められていることは言うまでもなく、常にアンテナを巡らせ研鑽^{けんさん}していくことが急がれます。知人との再会に、一期一会^{いちごいちえ}の大切さ、そして布教使としての原点に帰らせていただいたように思ったことです。

ひるがえって、宗教離れが進み世間一般に参詣者が減っている中で寺院の状況を見てみますと、法要日数が7日間から5日間に、4日間で2日間に、2日間で1日に減少し、お聴聞の場がいよいよ少なくなる傾向が進んでいます。以前は法座日数が2日間であれば2日通して参っておられていても、最近では1日だけお参りするという方が増えたのにも、今日的ないろいろな理由があるのでしょうか。しかし、ここでもっと聞法意欲^{もんぼう}を持つてもらうためには、布教使自らが積極的に^{えしよ}会所の住職と密接に連絡を取り合い、布教の際もわかりやすく工夫^{くわ}を凝らした法座にすることが大切だと思われまふ。「今、布教使は何を望まれているのか」を受信するアンテナは、自らが積極的に動かなければ決して自身に届くことはありません。

そして「今、布教使は何を望まれているのか」を考える時、ご門徒であり元国立岡山病院小児医療センター医長で、今は開業医の駒澤勝^{こまざわまさる}先生の姿勢がまさに布教伝道の実践であり、我々僧侶・布教使に対して示唆^{しき}してくれているように思えます。小児癌末期の子どもさんの病室に足しげく通い、一緒に「がんばろう」と言うのではなく、その子や親御さんが抱える悩みに寄り添い、「そのままがいいよ」と声をかけているのだそうです。こちらから積極的に接していく、寄り添っていくことが安心^{つな}に繋がり、そして安心できる言葉の中に、優しさや安らぎが伝わるのかもしれない。死に直面している子どもさんや親御さんは、駒沢先生を通して、阿弥陀さまの「そのままがいいよ、そのままがいいよ、みんな遇える別れのない世界があるよ」という声を聞くことができる。また先生は、阿弥陀さまの喚^よび声を自身の生き方の中心に置いて、患者さんやその親御さんと共に歩もうとされている。そんな日常生活を実践されている先生の姿に心と体が動かされます。

(布教団連合総団長補佐)